

NO. 27
October '99

newsletters

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

サル学と女性

川合 真一郎

日本のサル学(霊長類学)のレベルの高さには定評がある。学問としてのサル学が本格的に確立されたのは日本が最初であるともいわれている。また、動物学からサル学に入ってきた人たちの研究の動機の根源に人間への深い関心がある。「戦争が終わって来て、何故人間はこんな馬鹿げたことをするのか、こんなことをする人間の人間性というものを探るためにはサルまで立ち返って人間の根源を調べてみなければならない」。これは日本のサル学をリードしてきた人たちに共通した動機のようなのである。それはさておき、ヒトに最も近い動物であるチンパンジー(遺伝子DNAから見ると、ウマとシマウマの関係よりもさらに近い)の研究で先駆的なフィールド調査から、チンパンジーの社会や道具の使用の発見などですばらしい業績を挙げているのが英国人のジェーン・グドールである。1960年、26歳のときからアフリカのタンザニアのゴンベにチンパンジーの観察基地を置き、現地の人たちの助けを借りながら、野生生物に対する深い愛情をもち、粘り強く観察を続け今日に至っている。興味のある方はジェーン・グドール自伝「チンパンジーの森へ」(庄司絵里子訳、知人書館、1994)を読まれるとよい。野生チンパンジーの研究が進む一方で、飼育チンパンジーの知的行動、とくに言語学習に関する研究も多い。チンパンジーは言葉の能力がないとされてきたが、ピグミーチンパンジー(チンパンジーと非常に近縁でボノボと呼ばれる)が言葉の理解に大変優れた能力を持っていることを明らかにしたのはジョージア州アトランタにある霊長類研究所のスー・サベージランボーである。NHKスペシャルで「言葉を持った天才サル カンジ」が放送され大反響を呼んだ。私が現在、担当している「生命の科学」という授業科目の中で、毎年このビデオを教材として使っており、スーが話す内容をカンジが正確に理解して行動する様子やスーとカンジのやりとりには学生諸君も驚きかつ感激している。私自身、毎年このビデオを見ているが常に新鮮である。

ところで、ジェーン・グドールそしてスー・サベージランボーはいまでもなくいずれも女性の研究者である。岐阜県犬山市にある京大霊長類研究所は日本のサル学のメッカといってもよいが、近年、女性の研究

者が増え、大学院でも女性が圧倒的に多く、ある年は100%を占めたそうである。霊長類研のスタッフの話によると「女性のほうがサル学に向いているのかも知れない。男よりも観察眼が良い」そうである。生後5ヶ月の赤ちゃんをつれて、現地でベビーシッターを頼みながら屋久島のヤクザル(ニホンザルの一種)のフィールド調査をしている女性研究者もいる。従来、オスの研究者の目からサル为社会が観察され、いろいろな現象が報告されてきたが、メスの立場からサル群れを見ることの重要性も指摘されている。サル学ではないが、環境科学に関するテーマで卒業研究に取り組む本学の4回生の中にも、先の見えない、つまりモノになるデータが得られるかどうかかわからないようなテーマに粘り強く、食らいついていく者もあり、そのような姿に接したときの喜びは何物にも替え難い。

(大学研究所長、人間科学部教授)

ご挨拶

丸 島 令 子

女性学インスティテュートの前ディレクターの風呂本淳子教授の突然のご転任にともない残りの任期をお引き受けすることになり、改めてインスティテュートの過去の歩みを見ましたところ三つの見逃せない歴代のディレクターや関係者の方々のご尽力があったように思います。一つはAWI(The Asian Women's Institute: アジア女性研究所)への参加をもって女性学の視点と研究の志向性の第一歩とされたことです。このことからインスティテュートがアジアに身を置く我々をも含めたアジアの人々、男性や女性、子どもについて偏向や欠落のない視点を持って研究を行うという決意が伺えます。

第二の点はインスティテュート創設以来、女性学の是非について熱のこもった論争がなされましたが、そのような中でインスティテュートは様々なオールタイムな視点に対しオープンに対応し、研究者の自己省察と固定化した意識の変革に少なからぬ影響をもたらしたと思われることです。今一つの尽力は、研究機関であるインスティテュートの当然の姿勢としてアカデミズムが一貫して受け継がれてきたことです。それはみだりに改革や運動と連動することなく、女性を含めた新たな人間研究に理論や研究方法をじっくり創成することこそ目的とすることが見失われていないのです。

以上のことは講演シリーズの企画や公開講座として結実し、更には単位履修科目として「女性学」が開講されるというエポックも甘受されることになりました。私はこのような過去のディレクターや関係者の方々の遺産を継承し、発展させ、そこからまた新しいものを生み出す役割を担うべきと思っております。私は、女性解放運動の指導者と呼ばれるベティ・フリーダが1963年『The Feminine Mystique』を出版した時期に米国で家族論や臨床心理学を学んでいましたが、彼女も心理学を専攻した経歴を持ち、今日でいうジェンダーの概念を示唆したその視点の斬新さを感じたものでした。あれから30数年を経て、女性学の視点は多くの分野で無視できないものになっていると感じます。今年度から「学生懸賞論文募集」が行われています。学生の皆さんも大いに女性学の研究に参加してください。そして今後とも皆様のご支援とご協力をお願いいたします。
(女性学インスティテュートディレクター、人間科学部教授)

食品の安全性について

塩見尚史

小学生のころ岡山の総合グラウンドで遊んだ帰りに、「ひあしあめ」をよく飲んでた。アイスクリーム用の大きな入れ物に水が入れてあり、おじさんがコップに入れてくれたひあしあめは、衛生的とは言えないが、良く冷えて体中の疲れを潤してくれた。そのころは、水道の水もおいしいと感じながらぶがぶ飲んで汗を流していたものだ。ところが、大学に入って京都の喫茶店に初めて入った時、出された水の臭いとまずさに驚いた。食品の安全性にも注意を払う必要がある時代がきているとその時に初めて感じた。

ところで、健康食品は健康に良い食品なのだろうか。最近少し太ってきて糖分の入った飲料水を控えなければと思う。その点、お茶は健康によさそうに思える。確かにミネラルも豊富でガン予防にも良いらしいし、免疫を高めるのに良いという人までいる。しかし、自分で沸かしたお茶は別として、ペットボトルのお茶は製品の色合いなどを保つために防腐剤や安定剤などが入っている。また、ダイエットや整腸をうたい文句にしたオリゴ糖入り食品は、ダイエットしている人ならいざ知らず、ごはんを食べれば効果は望めない。無農薬は好ましくはあるが病原菌が住みつきやすく100%安全とはいえない。そして、本当の無農薬野菜は虫が食ったあとがあるはずであり、本当に無農薬なのかは疑わしいものが多い。企業は健康というイメージで健

康食品を売っている。イメージを買って満足するのが目的であればそれでも良いが、本当に健康を目的とするのであればそのメリットだけでなくデメリットも総合的に自分で吟味しなければならない。

では、安全性が問題視されているものは本当に健康を害しているのだろうか。数年前にプラスチックの容器から有害物質が出るということで、給食の食器が問題となった。私自身は「そんな微々たる量では問題ないのではないか」と思ってしまう。最近では、遺伝子組み換え食品が市場に出回り始めている。組み換えという言葉を聞くと普通の人にはアレルギー反応を起こし受け入れられないと思うが、私などは原理を知っているせいか、農薬や防腐剤を使用した食品よりも安全な気がして受け入れやすい。このように、安全性については情報に少し神経質に反応しすぎているケースも多いように思う。

人は若く、美しくそして何よりも健康でありたいと考え、科学技術に裏付けされた機能食品を氾濫させてきた。私はバイオの研究に10年以上携わってきたため、商品の中に使われている物質やその製造方法を知っていることが多い。そのため、効果や安全性について自分なりの判断基準があり、それほど健康食品に期待していないし、不安もない。しかし、普通の人には新聞雑誌のスクープに耳を傾け、それにしたがって食品の有効性や安全性を判断するため、企業のイメージ戦略や誇張されたスクープに躍らされ不安を感じる人が多いのではないだろうか。今後、好むと好まざるにかかわらず遺伝子組み換え食品は増加するし、ダイオキシシンなどに汚染された食品の報道も激化すると考えられる。情報に左右されないためには、十分に専門的な基礎知識を身に付け、健康であるためには何をいかに食べるかを自分で感覚的に判断できる能力を身につけることが重要であろう。有効性と安全性の判断が難しい現代の食品事情の中では、自分自身の安全基準を見出していくことが、健康な食生活の第一歩と言える。

(人間科学部助教)

子どもの心の病理に向き合う母親

榎木直恵

私は西明石にある情緒障害児短期治療施設「清水が丘学園」で心理治療の実習をしています。情緒障害児短期治療施設は児童が入所や通所、外来という形で心理治療と生活指導、学校教育を受ける施設です。大半が不登校児童ですが、最近では被虐待児童の措置件数が増加したことなどから、重い精神疾患を持つ児童の

利用が増えています。そして、ここでは、プレイセラピーだけでなく、母子平行面接、家族宿泊、親のグループ活動なども行っています。

来園されるお母さんは「自分の育て方が間違っていたのではないか」という自責の念が非常に強く、セラピストは不安を取り除き、これまでの苦勞をねぎらうことから関係を作っていきます。そして、子どものことを考えるうち、いつのまにかお母さん自身が抱えておられる問題に気付かれ、相談を通じて変化してゆくと同時に、子どもの症状も改善されてゆくというケースを見るとき、いかに子どもとお母さんが共鳴している存在であるかを感じます。鏡のように、お母さんが気付かない問題を、子どもは症状として訴えているのだと思います。

ある神経症児の治療を進めてゆくうち、それまでは大人に甘える事ができず、こわばった表情だったのが、プレイセラピーを通じて生き生きと自分を表現し始め、遊びに夢中になれるようになりました。そして、この頃から、以前は叱ったり指示ばかりしていたお母さんも、表情や声が柔らかくなり、投げやりな感じだった服装にも気を遣われるようになり、年齢より幼い印象だったのが、急に「お母さんらしく」なれた気がしました。

母親が子どもの心の病理に向かい合うとき、子どもの頃の自分、あるいは自分の親との関係と改めて向き合っておられるのだと思います。面接を進めてゆくうちに、お母さん自身が、子どもの頃学校に行けなかった、虐待家庭に育った、摂食障害だったということがわかることもあります。そういう意味では、お母さんの育て直しを行っていると言えるかもしれません。かといって、セラピストだけがお母さんの育て直しもしてゆくことには限界があります。そこで、今後は、同じ経験を語り合う事で自信を取り戻し、子どもとの距離の取り方を学ぶことのできる親のセルフヘルプグループ活動がより大きくなる事を期待しています。

そして、お母さん自身にユーモアが出て、子どもと一緒にふざけることができるようになると、ずいぶんよくなったなあと感じます。それ自体が、とても難しい事ですが、まず自分が子どもと一緒にいる事を楽しんで、自信を持って子どもに接して欲しいと思います。しかし、子どもをかわいいと思えない、どう扱っていいかわからないという訴えを持つお母さんを見ると母性とは本能なのか、どのように獲得されてゆくものなのだろうという疑問も生じます。

最後に、私自身、今後も実践から学ぶとともに、被虐待児の心理治療や早期の母子関係についても勉強してゆきたいと思います。(大学院人間科学研究科修士課程1回生)

『女と男』

正木 芳子

夫婦別姓法案はどこへ消えてしまったのでしょうか。一時期ずいぶん盛んだった議論すらこのごろでは見かけなくなってしまいました。

私は大学では基本的に旧姓である「正木」を使っています。不便なことも結構ありますが、これは譲れません。結婚したら、夫婦いずれかの姓を名乗る、ということになっていますが、まだまだ妻の姓を名乗る、というのは少数派で、妻の姓を名乗ると、「婿入りですか」と言われる、というのが実状でしょう。結婚するとき、私の姓を使うということも考えたのですが、正直なところ、夫の両親ともめたくない、という理由で、戸籍上は夫の姓である「勝谷^{かつや}」を使うことにしました。夫の両親は、娘がいないこともあってか、「嫁にももらった」という意識が強いのですが、私は「嫁にももらった」つもりはない。もちろん、夫の両親は、大切です。でも、自分の両親も大切。夫にもそう思っていてほしいし、義父母にもそんな気持ちをわかってほしい。また、それ以上に、私は私である、という自覚を持っていたい。勝谷さんちの芳子さん、ではなくて、正木芳子、という自分を持っていたい。そんな思いから、できるだけ旧姓を使う努力をしてきました。マンションの郵便受けにも、「勝谷・正木」と書いてあります。結婚当初、それを見た義父は、「同棲してるみたいやなあ」と言っていました。1、2年経つと何も言わなくなりました。

娘が育って、名前に興味を持つようになると、どういう反応をするかなあと思ったのですが、それほど混乱もせずに、「おかあさんには、ふたつ名前がある」と認識しているようです。個人として友人とつきあっているときや、仕事をしているときの私は、「正木芳子」であり、家族の中で、自分のおかあさんとしての私は、「勝谷芳子」である、というように。

保育所に子どもたちを迎えに行くときには、「正木芳子」から「勝谷芳子」に変わる自分を感じます。逆に、保育所に子どもたちを預けて車に乗った途端、「勝谷芳子」から「正木芳子」に変わる自分も感じます。このメリハリが今の私にとってはとても大事なのでは、と思うのです。(文学部専任講師)

1999年度前期活動報告

特別講演会 1999年5月17日(月)

「職場における男女の共生
(セクシュアル・ハラスメントの防止について)」

会場：神戸女学院大学文学部2号館22教室

講師：岩本洋子氏

(弁護士：一般
民事法・会社
法、神戸女学
院大学非常勤
講師)



岩本洋子氏

[出席者：115名]

講演会 1999年6月25日(金)

(連続企画「女性と健康」〈No.1〉)

「女性と攻撃性」

会場：神戸女学院大学デフォレスト館207教室

講師：山口素子氏

(神戸女学院大学人間科学部助教授：
臨床心理学)

[出席者：85名]

講演会 1999年7月16日(金)

(連続企画「女性と健康」〈No.2〉)

「ビル解禁と女性の自己決定権」

会場：神戸女学院講堂

講師：荻野美穂氏

(京都文教大学人間学部助教授：
近現代女性史・ジェンダー論)

[出席者：145名]



山口素子氏



荻野美穂氏

— 新ディレクター就任 —

風呂本淳子前ディレクターの転任に伴い、1999年4月1日より、女性学インスティテュートディレクターに丸島令子人間科学部教授が就任。任期は風呂本前ディレクターの残任期間である1999年4月1日より2000年3月31日まで。

— 学生懸賞論文制度について —

女性学インスティテュートでは1999年度より学生懸賞論文制度(「女性学インスティテュート賞」)を設けることになり、1999年7月5日付で論文募集を開始した。締切は1999年9月末日。本学学生(学部生・大学院生)及び前年度の本学卒業生・修了生が執筆した女性学、ジェンダースタディーズに関連する領域の論文が対象となる。最優秀賞論文(1編)には5万円の賞金及び賞状、最優秀論文(2編)には各2万円の賞金及び賞状が授与され、最優秀賞論文については『女性学評論』第14号(2000年3月発行予定)に全文が掲載される。審査結果の発表及び表彰は1999年11月上旬頃の予定。

図書・資料をご利用ください

女性学インスティテュートでは、女性学関係の図書・資料の閲覧・貸出を、下記の要領で行っています。

- ◎開室時間 月～金 8:30～16:30
但し、夏・冬期休業中の一定期間は閉室となります。
- ◎利用資格 本学教職員・学生・卒業生
- ◎閲覧 開室時間中は自由にご覧ください。
- ◎貸出期間 2週間
但し、授業[CU234(1)(2)「女性学」]参考書の場合は1週間です。
- ◎貸出冊数 8冊まで

※ 図書の閲覧・貸出希望者は、図書館本館1階 T-14・13室まで(*貸出・返却の手続きはT-14で行ってください。)

1999年度女性学インスティテュート編集委員

川合真一郎、丸島令子(委員長)、溝口 薫、上西妙子、
頼藤和寛(ABC順) 編集事務：豊福裕子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545